

「ありがとう!おばあちゃん、すっごく助かった!」

祖母のこの言葉と笑顔が大好き!私の祖母は去年5月に亡くなりました。

幼い私が少しお手伝いをしただけで、大げさに喜んでくれて、私も思わず笑顔になりました。優しく、真っすぐな祖母。私には祖母との思い出が数えきれないほどあります。

私の祖母は「網膜色素変性症」という進行性で難病の視覚障がいをもっていました。5ミリほどの穴からのぞいているくらいの視野で、視界も白くぼやけて、ほとんど何も見えていない。若い頃は、車も運転していたそうですが、30代の頃、視力の異変に気づき、その病名を告げられたそうです。祖母の家が近いので、幼い私は毎日のように祖母に会いに行きました。祖母が何か探していたら一緒に探したり、お料理を手伝ったり、私が何気なくやっていたことに対して、祖母は「とても嬉しかったんやよ。」と入院中、何度も手をにぎりながら笑って話してくれました。

入院するまで祖母はとても活発な人でした。困っている人を見ると、助けたいと思う性格でした。それは、自分の母親を早くに亡くしているからだろうと、私は母に聞いたことがありました。「自分の母にしてあげられなかった後悔があるから人の為に何かしたい。」と障がいを持っている方々へのボランティアや支援をしていました。

祖母は、難病を宣告され、その方々の気持ちを理解できたようでした。「いざ自分が本当に見えなくなると、その恐怖感や絶望感は言葉では表せない。」と言っていました。そのような状況のなかでも「家族を守らなければならない。」と強く決心し、孫の私や姉を大切にしてくれました。

「ここちゃん、人はな、自分がその立場にならんかったら、ほんまの気持ちや痛みは分からんけどな、ほんのちょっとその人の気持ちに寄りそったって。」と言っていた祖母の言葉を、少し大きくなった私はやっと理解することができたように思います。

私は、祖母のボランティア活動にもよく一緒についていきました。障がいのある方々と音楽演奏を一緒に楽しんだり、食事のお手伝いなどを度々していました。祖母のおかげで私は色々な方々とふれあう機会が多かったのだと思います。しかし、小学校では「障がい児・障がい者」ということを特別視する友達もいて、人とちがうことを受け入れない空気を感じました。そして、そのときふと思い出したのです。「人は、自分がその立場にならんとほんまの気持ちが分からん。」という祖母の言葉を。

またある時、義足のランナーの特集をテレビで見ました。その番組のなかで事故で片足を失った青年が「なんで自分が…」と絶望したが「色々な人に助けられて今があり、パラリンピックに出場するまでになれた。」と語っていました。その青年と同じようにきっと祖母も辛さを乗り越えてきたんだろうと思います。私もふくめ、忙しい生活を送りながら、他の人の気持ちを考えるのは難しいです。しかし、私達も色々な人に支えられて大人になっていきます。壁にぶちあたったとき、手を差しのべてくれる人がいるからこそ生きていけるのです。祖母が私に残してくれた「人のために」という気持ち。祖母の思いをたしかに受けついで、私はいつも「私にも何か出来ることはないか。」と探しています。

「ありがとう!おばあちゃん、すっごくたすかった!」祖母の声は今も私の胸にひびいています。